

営農情報

第14号 平成28年5月11日発行

(水稲営農情報 病虫害防除)

福岡大城農業協同組合
南筑後普及指導センター

5月下旬頃から28年産米の育苗作業が始まります。“苗半作”と昔から言われるように、良質米の安定生産のためには健苗の育成が重要です。

～ポイント～

- ◎田植予定日から逆算して、種子の浸漬日や播種日を決めます。
- ◎高温障害を避けるため、田植は6月20日以降に行います。

1 種子消毒

(1)種籾10kg当たり下記農薬の混合薬液20リットルを用い、24時間浸漬します。

薬剤名	使用濃度（種籾10kg当たり使用量）
テクリードCフロアブル	200倍（100ml）
スミチオン乳剤	1000倍（20ml）

※いもち病対策を強化する場合は、ベンレート水和剤も混合する。

(2)浸漬中は薬液を2～3回かき混ぜ、全体に薬液がまわるようにします。

浸漬後はそのまま催芽します。

(3)種子消毒に使用した薬液は、河川・クreek等に絶対流さないでください。

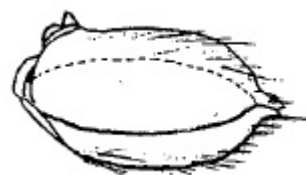
2 浸種及び催芽

(1)種子消毒後、4～5日間浸種します。

(2)催芽（芽出し）の程度は、鳩胸程度～1mm位が適当です。また、種籾が酸素不足にならないように、**浸種中の水は毎日交換するとともに、種子の芽出しをそろえるため上下を入れ替えます。**

(3)浸種する場所は、発芽ムラや高温障害の原因になるため、直射日光が当たるところは避けてください。

この程度まで催芽させる（鳩胸程度）→



(裏面に続く)

3 播種及び出芽

- (1) 1箱当たり催芽糶1合5勺～1合7勺となるよう播種量を調整します。厚播きすぎると苗が軟弱になり活着が悪くなります。
- (2) 播種時にかん水を兼ねて、苗箱20箱当たり水10リットル当りタチガレエース液剤20ml(500倍)を混ぜて、かん注します。
- (3) 健苗育成及び育苗中の病害発生予防のため、**平床出芽を基本**として下さい。

平床出芽

積み重ねより1～2日出芽が遅れますが、ムレ苗等の育苗障害が出にくく、健苗が育成できます。

- ①まとまった雨が降っても、冠水しないような育苗場所を選定します。
- ②箱を並べる用地を水平にします。
- ③田畑に並べる場合、ビニールをしきます。根が地面に下りるのを防ぎます。
- ④厚さ1～3cmの台木またはパイプをわたすことで、苗箱を水平に保ち、水分の偏りをなくします。高い部分は乾燥しやすくなり、出芽・生育が不良となります。
- ⑤播種時に水をたっぷりかけておきます。出芽まで苗箱は乾燥しやすいので、水を十分かけないと出芽不良となります。
- ⑥苗箱を並べます。

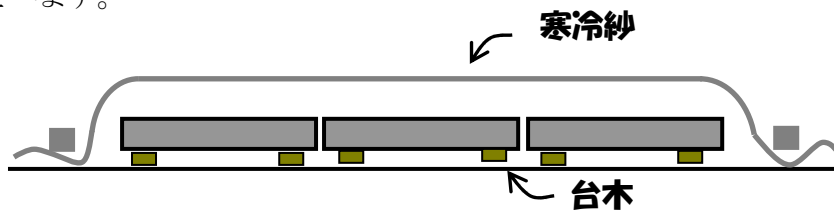


図 平床出芽の方法

- (4) 水管理は、天候によりますが、寒冷紗二重の期間は1日1～2回、寒冷紗除去後は1日2～3回ジョロ等で十分かん水します。天候により乾きやすい場合があるので、十分注意しましょう。

注 意

「元気つくし」を育苗する場合、「元気つくし」は苗が伸びやすいので、「ヒノヒカリ」よりも1～2日早めの寒冷紗を除去するよう心がけて下さい。